

あなたが

世界を

読むために

Ways of Reading —

How the World Speaks to Us,
How We Speak to the World

2026.11.19 木

Thursday

2027.1.11 月祝

Monday Holiday

東京都美術館 ギャラリーA・C 観覧無料

全身で想像する — エレナ・トゥタッチコワ (1984—)



《裸婦小立像》1946年頃 石膏、彩色 8.9×3.7×2.3cm 神奈川県立近代美術館 撮影：菅谷守良

光で読む — アルベルト・ジャコメッティ (1901—1966)



100th Anniversary



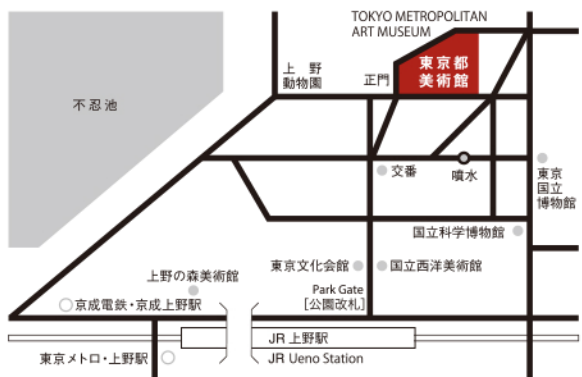
東京都美術館



《Timelines, #3》2025-26年 セラミック (ポーセリンを含む)、釉薬とスリッパ、テラ・シジラータによる表面加工 35×84×5cm 作家蔵 撮影：エレナ・トゥタッチコワ

エレナ・トゥタッチコワ (1984—)

本展における「読む」とは、想像力と身体を通して世界に触れる営みです。エレナ・トゥタッチコワは、思考、想像、身体経験の循環をひとつながりのプロセスとして表現しています。彼女にとって、「歩くこと」は創作における重要な手がかりのひとつです。移動を通して思考の道がひらかれ、多層的な時間の感覚が立ち上がる中で、外の世界を移動すること、スタジオにおける静寂な時間が、往還しながら重なり合い、やがてひとつのリズムをつくっていきます。近年取り組むセラミック作品では、変容する物質である粘土と、釉薬による色の層が、身体と思考の循環を内包しながらかたちを得て、「世界の手触り」として現れています。本展では、新作のセラミック彫刻「Islands」の連作に加え、レリーフ、ペインティング、アニメーションを含むインスタレーションを通して、想像の地図をたどるような体験の場がひらかれます。



〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36
03-3823-6921 (代表) <https://www.tobikan.jp>
交通のご案内 | JR上野駅「公園改札」より徒歩7分、
東京メトロ銀座線・日比谷線 上野駅「7番出口」より
徒歩10分、京成電鉄京成上野駅より徒歩10分
*駐車場はございませんので、車での来場はご遠慮ください。



自然から読む — 砂澤ビッキ (1931—1989)



《神の舌》1980年 ナラ 203×120×60cm 札幌芸術の森美術館 撮影：佐藤雅英

東京都美術館開館100周年記念
100th Anniversary of the Tokyo Metropolitan Art Museum

あなたが世界を読むために

Ways of Reading — How the World Speaks to Us, How We Speak to the World

開期 | 2026.11.19 (木) - 2027.1.11 (月・祝)
開室時間 | 9:30 - 17:30 (金曜日は20:00まで) *入室は閉室の30分前まで
休室日 | 12/7 (月)、12/21 (月) - 1/3 (日)
主催 | 東京都美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)
協力 | 株式会社ニコン、株式会社ニコンイメージングジャパン
会場 | 東京都美術館 ギャラリー A・C
*詳細・最新情報は当館ウェブサイトをご確認ください。

同時開催 (観覧無料)
東京都美術館開館100周年記念
はじまりをひらく 東京都美術館の100年
主催 | 東京都、東京都美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)
会場 | 東京都美術館 ギャラリー B

Exhibition Overview
Period | November 19 (Thu.), 2026 -
January 11 (Mon.), 2027
Closed | December 7 (Mon.),
December 21 (Mon.) - January 3 (Sun.)
Hours | 9:30 - 17:30 (Fridays, 9:30 - 20:00)
*Admission until 30 minutes before closing time.
Venue | Tokyo Metropolitan Art Museum
Admission | Free
*7min. walk from JR Ueno Station "Park Gate"

砂澤ビッキ (1931—1989)

真冬には、時に氷点下三十度まで冷え込む、北海道の音威子府(おといねっふ)村。積雪の厚みによって、染み入るような静寂に包まれた一面の銀世界では、自然の「存在」が極めて近くに感じられます。砂澤ビッキは、この地の廃校となった小学校を住居兼アトリエとし、巨木へ格闘を挑むかのように「かたち」を立ち上げていきました。かつて生命を宿していた堅牢な「身体」と向き合い、鑿(のみ)への抵抗を引き受けながら探られたフォルムには、ほのかな聖性が宿っています。砂澤は「自然の中に芸術があって、芸術の中に自然がある」と語り、自らが手掛けた木彫が、野外で風雪により朽ちていくことをも厭いませんでした。作品は、自然の循環の只中でその姿を変えながらも、揺るぎない気配を湛えています。砂澤にとって、木を用いた彫刻の制作とは、自然と自分との距離を「ゼロ」にするための行為でした。その強い意志は、今も鑿痕として、はっきりと刻まれています。



自画像 1951年 セラチン・シルバー・プリント 17.3×17.3cm 株式会社谷川俊太郎事務所

谷川俊太郎（1931—2024）

二眼レフカメラを構え、鏡の中の自分を見つめる一人の青年。

1952（昭和27）年、詩集『二十億光年の孤独』でデビューする谷川俊太郎は、当時十九歳。

この頃、詩作の傍ら、写真の撮影に熱中していました。

若き日の詩について、友人であった詩人の大岡信は「孤独でしかも明るいまなざし」と評していますが、それは谷川の写真にも通じる要素です。

十代後半、谷川は詩作や撮影と並行して、ラジオの組立にも夢中になっていました。後年には欧米のヴィンテージ・ラジオの収集にも情熱を傾け、想像の世界へと人を誘うラジオの磁力に惹かれ続けていたのです。

「何故詩を書くのか」との問いに「世界と、すなわち言葉とたわむれたいから」と答えた谷川。詩と写真、そして「音の箱」は、いずれも「世界」に焦点を合わせる装置であり、言葉が立ち上がる瞬間と深く関わっていました。

本章では、写真、詩、そして旧蔵のラジオを通して、若き詩人の「創造と想像の時」を辿ります。

This exhibition is held in celebration of the 100th anniversary of the Tokyo Metropolitan Art Museum. Grounded in the museum’s guiding mission —“to provide a place for creation and coexistence where individuals reflect on themselves and deepen their connections with the world” —it takes “dialogue with the world” as its central theme.

To “read” is an active process: a movement toward the unknown and a deepening of perception. Through the works of five artists from differing periods and creative contexts, the exhibition explores diverse ways of entering into dialogue with the world —by “Reading through Light,” “Reading through Time,” “Reading through Words,” “Reading through Nature,” and “Imagining with the Whole Body.”

The sculptures, photographs, texts, and paintings presented here invite a variety of modes of engagement. In such moments, one may encounter something that quietly sustains one’s own existence.

The key to opening the door to new worlds lies within each individual who approaches the works with openness and quiet attentiveness. It would be our greatest pleasure if this exhibition offers an opportunity to experience this for oneself.

Reading through Light — Alberto Giacometti (1901–1966)

Reading through Time — Momo Yamanishi (1995–)

Reading through Word — Shuntaro Tanikawa (1931–2024)

Reading through Nature — Bikky Sunazawa (1931–1989)

Imagining with the Whole Body — Elena Tutatchikova (1984–)



「光の王国」より 2025年 作家蔵

山西もも（1995—）

淡い光がにじむ写真は、山西ももが自作した簡素なピンホール・カメラにより、ネパールで撮影されました。箱に開けた小さな穴から光を取り込み、フィルムに像を結ぶことで、デジタルの精細さとは異なる柔らかな風合いが生まれています。現地には多くの洞窟があり、そこでピンホール現象を思い浮かべたことが、撮影の契機となりました。

山西は大学で鑄金（ちゅうきん）を学んでおり、ネパールでアンモナイトの化石を見つけた際、それが「時間の鑄造物」であると直感しました。数千万年の時を経た化石のプロセスは、溶けた金属が「型」の中で「かたち」を得る、鑄造の原理と響き合います。そして、箱の中に光が入り込み、内部で像を結ぶ写真のプロセスもまた、鑄造の原理と重なりました。化石とは、生物が石へと変じたものであり、かつてのアンモナイトと同じではありません。「光の鑄造物」である写真も、時の作用によって生成される「変容したイメージ」なのです。

アルベルト・ジャコメッティ（1901—1966）

アルベルト・ジャコメッティは、細長い人体像で知られる彫刻家です。

彼は、作品の大小に関わらず、彫刻の在り方は同じであるべきという信念の持ち主でした。

その彫刻はどれも光によって驚くほどの変化を見せます。

「巢」と評されたバリのアトリエには、制作の苦闘を物語る石膏の残骸が、常に溢れていました。

作っては壊し、また作っては壊す——終わらなき日々が繰り返されていたのです。

二十年以上にわたり、彼を撮影した写真家のエルンスト・シャイデッガーは、

ジャコメッティの石膏像には「光の遊び」があると語っています。光によって変化する石膏像を撮ることは、彼にとって何よりの喜びでした。

彫刻家を見つめ続けた写真家の言葉には、創造の核心に迫る手がかりが潜んでいます。

存在とは、言語による説明を超え、光によって揺れ動くものなら——。震えるような彫刻に宿る

「光の顕れ」こそが、彫刻家に仮初の終わりを告げる、鮮烈な瞬間だったのかもしれない。